
fall～coda～autumn

井能枝傘葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

f a l l \ c o d a \ a u t u m n

【Nコード】

N 9 5 2 5 W

【作者名】

井能枝傘葉

【あらすじ】

秋はいろいろある。食欲、スポーツ、芸術、読書。人それぞれ様々な秋。

彼が選ぶのは、どの秋だろうか？

prologue

ナントカの秋………○○の秋、と言った方が良いでしょうか？
とりあえず、そういうものがあるのはご存知だろう。

食欲の秋、スポーツの秋、芸術の秋、読者の秋、等々。

それが何故あるか、何故そう呼ばれているか、ご存知だろうか？

俺は、知らない。

ただ、こう考えた事がある。

春は桜舞う中、入学、あるいは卒業、出会いの嬉しさや別れの悲しさが交差する。そんな季節。

夏は日が伸びて暑く、太陽きらめく夏休みに楽しみや忙しさの混じる。そんな季節。

冬は雪降る寒い日々に、年末と年始、新しさへの慌ただしさ溢れる。そんな季節。

では、秋はどうだろう。

夏のように暑くも、冬のように寒くもない、虫や動物が冬ごもりの為、春よりも行動が分かりやすくなる。

つまり、何かをするにはうってつけの季節。

しかし、暦で考えれば秋は立秋の8月8日から立冬の11月8日まで、8月はまだ夏だし、11月も冬の方が近いだろう。

9月23日の秋分は、まあ秋だろう。

その秋と呼ばれる8〜11月の3ヶ月、学校では運動会や学園祭がある……

そう、秋は基本的に気候が良くて、暇が多いのだ。

この先に冬に寒くて動きたくなくなる、ならその前に色んな事をしよう。そう思った人々が、様々なことをして、その秋の名を作ったのだと、俺は思う。

人それぞれ、自分の秋がある……

……俺には、どの秋が一番合うのだろうか？

prologue (後書き)

始まりました。秋の物語、fall～coda～autumu
プロローグを語る彼は、これからおこる出来事を、この時はまだ知
らない。

そしてそれを知った時、彼が選択するのは、自分の秋を探すこと……
定期的に更新できるよう努力いたしますので、願わくば応援のほ
どを。

それでは、

1st day ?

——という所で、目が覚めた。

「ん……？」

いや、正確には起こされたようだ。机の上で、電話着信のメロディを流す携帯に。

「ったく……誰だよこんな朝早くに」

時計を見ると、セットしたアラームにはまだ20分くらい早い時間だ。電話が鳴らなけりやまだ後20分は寝てられたのに、と思いながらまだ鳴り続ける携帯を取り、ディスプレイの発信者を見た。

「……竜華か」

名前を確認してから着信ボタンを押した。

「ふぁい？」

まだ眠気の残ったまま変な返事をする。

『なんだ、その妙な返事は？』

案の定指摘された。

「これに起こされたからだよ、普通ならまだ寝てるからな」

『普通なら、だろ？　だが忘れてないか？　今日お前がなんなのか』

今日？　……ああ。

「そうか、今日日直だったな」

しかしつくづく日直の決め方がおかしいよな。小中学校では出席番号とか席順だったが、まさか前日に引いたくじで決めるとか。4日連続してる奴とかいたし。

『日直だったな、ではない。日直だから早く行くのだろう。それなのになぜいつもの時間に行こうとしていたんだ』

あーそうだった。日直は日誌を担任からもらったりとか色々な仕事があって、先生が来る前に終わらせないといけないから早く教室に行く必要があるんだ。

竜華はそれを知ってて（普通は知ってる）俺を迎えに来てくれたの

か。

『起きたなら早く支度しろ、あまり遅いと先に行ってしまうぞ』

「へーい」

ぶっちゃけ言えば、先に行かせて任せちゃいたいが……後で何言われるか分からないからな……

あの竜華の事だ。真面目にやっておいてから、俺が反論出来ないと分かって正論で怒ってくるだろう。

「さすがに、それはカンベンだな」

俺は布団から出ると、制服に着替え始めた。

学生寮の自分の部屋の扉に鍵をかけ、俺は寮の入り口に早足で向かった。

扉を開けて外に出ると、

「来たか、思っていたより早かったな」

壁に寄りかかっていた竜華を見つけた。

黒に瑠璃色を溶かしたような濃い青に見える髪を後ろでポニーテールにまとめ、学校指定の冬制服に身を包み、学生鞆を肩にかけていた竜華は、壁から背を離して俺を正面に見た。

あおかわりゆうか
青川竜華。俺とは小学生からの知り合い、幼なじみというやつだ。

いや、小学校の6年、中学の3年と、偶然同じになった高校の3年の今に至るまで同じクラスになり続けているから、幼なじみというより腐れ縁と言わなければならない。

「さっさと行くぞ」

俺を見るなり、竜華は背を向けて学校へ歩き出した。俺は隣に行つて並んで歩く。

「それにしても、ずいぶん寒くなったよな」

まだ秋と呼ばれる月だが、日に日に冬へ近づく今日、肌に当たる風は冷たく、寒かった。

「だらしないな、今そんな事を言っていたら冬を越えられないぞ」
呆れたという風に竜華は肩を落としたため息をついた。なんというか、竜華の俺に対する態度の方が若干冷たい気がした。

まあ、中学くらいから急にこうなったが、もう慣れた。

「そんな事言ったって寒いもんは寒い、これは冬休みには冬眠するしかないな」

「そんなの私が許さないぞ、冬休みは毎朝叩き起こしてやる」

「げ、マジっすか……」

冬眠とまでは言わないが、冬休みは睡眠時間を増やそうと思ってたんだが。

竜華がこう宣言したら、忘れていない限り必ず実行する。つまりこのままでは冬休みに毎朝叩き起こされるはめに……

なんとか忘れてくれないものか……

「あ」

寒いと言えば。

「どうかしたのか？」

「竜華」

「だからどうした？」

「ありがとな、わざわざ寒い中迎えに来てくれて」

その瞬間、

「な!?!」

目を丸くした竜華の顔が赤くなった。この寒い中、逆に暑そうだ。

「な、なにを言っているんだ彰! 私はまだ、お前が日直をサボらないように来ただけに過ぎない! か、勘違いはするな!」

いきなり叫んだ竜華は真っ赤な顔のまますたと歩を速めて行ってしまった。

「な、何だ?」

何で竜華の奴怒ってんだ? 俺はただ、この寒い中待たせて悪かつ

たな、って詫びただけなんだが。

そりゃまあ、竜華の言う通り俺がサボらないようになんだろうが、女子寮って男子寮より学校に近くて、来ると必然的に学校への遠回りになるのを竜華が知らないわけないんだけどな。それに、そもそも電話なら寮の前へ来る必要は無いはず。

じゃあ、何で竜華は俺を迎えに……？

「彰！ なにをしている、早く行くぞ！」

だいぶ前に行く竜華に呼ばれた。

「……ま、いいか」

考えたところで答えは出ないだろうしな。

もう一度呼ばれる前に、俺は竜華の後を追った。

1st day ? (後書き)

まずは主人公と、その幼なじみをご紹介します。

あれ？　そういえば主人公の名前出てない……？

つ、次には必ず出てきますよ……多分。

それでは、

1st day ?

俺の名前は、彰。

多分『あきら』と読みたくなるだろう、もちろんそれが普通の読み方だから仕方ない。

けど、これの読みは『あき』。俺の本名は、みどり緑葉彰。

始めて俺の名前を文字で見た人は、ほぼ100%間違える。なので最近では半場諦めていたりする。

まあ、童華を始めとした友達はやんと呼んでくれるし、先生は苗字呼ぶからあんまり悩んでないけど。でも……秋生まれというだけでこの名前をつけるのはどうなんだ両親？

などと考えてる間に学校へと到着。職員室に行って担任から日誌を貰い、俺たちの教室——3—Dへ。

扉を開けて中に入ると、すでに何人かクラスメイトが来ていた。

別に日直だからって一番に来る必要は無い。ただ先生が来る前に黒板の掃除とかしておけば良いだけだからな。

「おーっす彰、日直ごくろうだな」

俺を見つけた晴斗が声をかけてきた。

本人曰く染めたらしいが、よく見たいと分からないこげ茶色のショートカットに、黒縁のメガネをかけている。

コイツの名前は藍田陽斗。あいだはると俺の友達で、『出席番号は一番以外なっただことがないぜ！』と、どうでもいい事を自慢してくる奴だ。

「ん？ 今何か失礼なことかかんがえなかったか？」

そして妙にするどい奴でもある。

「いや別に、おはよう陽斗」

俺の後から入ってきた童華にも、他のクラスメイトから声がかけられた。

「りゅーちゃんおはよー」

セミロングの髪を頭の左右でおさげにしている、明るい茶髪的女子。

彼女の名前は山吹奈津保^{やまぶき なつほ}。言わずもがな、竜華の友達だ。

「ああ、おはよう奈津保」

竜華も挨拶を返す。

「あき君もおはよう」

続いて山吹は俺にも挨拶。俺が返すと、鞆を席に置きに行く竜華についていき、俺も自分の席に――一番後ろの窓から三列目、つまり真ん中。先生の目が届き難そうな届き易そうな場所へ鞆を置き、椅子に座った。

「そーいや彰、知ってるか？」

陽斗が隣の席に座りながら訪ねてくる。

多分、言いたいことは分かった。

「転校生の話か？　しかもこのクラスに」

「なんだ、知ってたのか」

「俺今日日直だそ？　さっき日誌貰ってきた時に先生に聞いたよ」

「そーいやそーうだな、で、どう思う？」

「何がだ？」

「転校生だよ。男か女か、彰はどっちだと思う？」

「あー……」

そこまでは言わなかったからな先生。性別は分からないが……

「席は、そこだろうな」

陽斗の座っている席を指さした。

実はそこ、陽斗の席じゃない。だが指定された誰かの席というわけでもない。少なくとも今は。

ここは俺達が3年生になる時、転校して行ってしまった生徒の席。席替えの度ここはそのままで、現在隣は俺となっている。

それが今日、埋まるようだな。

「いやそれはわかってるからさ、男と女、どっちだと思う？」

陽斗は再度同じ質問をしてきた。

「ふむ……」

どっちにせよ隣の席で今日日直だから俺が世話役になるだろう。と

なれば、なるべく話しやすい人の方が良いよな……まあ、基本的に誰とでも話せるけど。趣味らしい趣味もなく、色んな知識を広く浅く持つ俺は、大方の話題に首を突っ込めるといふ変わり者スキルを持っている。

「とりあえず、好きなものを聞いてその話で盛り上がるだろうな」
転校生への接し方は、これで良し。

「いやいや、あのな彰？」

陽斗が怪訝そうな顔を向けてきた。

「オレが言ってること伝わってるよな？」

「分かってるよ、ちよつとした冗談だ。転校生の性別だろ？」
しかし、確率50%とは言え、難しいよな。

「何なら、久々に賭けるか？」

「お、良いね、負けたら昼休み購買ダッシュな」

「OK、で、どうする？」

「そうだな……」

その時、

「彰」

不意に竜華に呼ばれた。見れば席の前に立っている。その隣には山吹がいる。

「まだ黒板を掃除してないぞ」

「へーい」

やれやれと席を立ち、黒板の前へ、黒板消しを持って縦に拭いている。右側から俺、左側から竜華だ。

「ナツはどっちだと思う？」

「うーん……」

ついてきた陽斗と山吹は教卓の前で転校生について話していた。ちなみに、陽斗は山吹を「ナツ」と呼び。山吹は陽斗を「ハル」と呼ぶ。この二人もまた、俺と竜華のように幼なじみなんだ。

「じゃあわたしは女の子！ ハルクンは男の子ね」

二人の間でも賭けが発生したらしい。

「ねえねえ、りゅーちゃんはどっちだと思う？」

「ん？ そうだな……」

手を止めぬまま竜華は考える。そしてちょうど黒板を拭き終えたところ、

「では、私は男に賭けてみよう」

と言った。

これで、数により俺は必然的に女を選ぶことになった。

チャイムが鳴り、HRの時間となった。

皆珍しく自分の席に戻り、そしてさらに珍しく静かに、担任、というより転校生の登場を待った。

3分後、教室の扉が開いて、担任の谷門先生が入ってきた。今年教職6年目の男性教師、科目は体育だ。

「何だ？ 妙に静かだな」

教室内を見て、雰囲気気づいたらしい。

「やはりあの噂はもう聞いているらしいな、日直が話したか？」

その前から知ってましたよー。という生徒の声を聴いて、先生は教卓に荷物を置くと、チョークを一本持った。

「じゃあ要望を叶えてやるか、入ってくれ」

先生が呼ぶと、教室の扉が開いて、一人の生徒が入ってきた。

瞬間、ざわざわと教室内が騒がしくなった。声は全部、転校生について。

腰まで届くほどに長い、軽いウェーブのかかった茶髪。前の学校の物だろう、この学校のとは違う制服。

深緑色のブレザーに、チェックのスカート。転校生は女子だった。

「じゃあ朱井、自己紹介しろ」

「はい」

黒板に名前を書いた先生に言われた転校生は、深く息を吸い、
「本日、こちら3年D組転校してきました、朱井あかいさくや雀耶です。皆さん、
どうぞよろしくおねがいます」

言い切って深く一礼した。

クラスメイトは各々に「よろしくー」とか、「かわいいー」等感想
を言っている。

「朱井の席はそこ、緑葉と南野の間な」

「はい」

クラスメイトの視線を集めながら席がある最後尾へ。

「よろしくお願いします」

右隣になる南野から順に律儀に反時計回りに隣接する4人に挨拶し
ていく。

そして俺の番になった。

「よろしくお願いします」

「ああ、よろしく」

そこでようやく自分の席に座った。

「今日日直の青川と緑葉は朱井の世話を頼むぞ。特に緑葉、席が隣
だから教科書とか見せてやれ」

「へーい」

やはり予想通りになり、返事をする。

「というわけでさ、教科書が揃うまでは俺か、そっちの南野のから
見せてもらってくれ」

「はい、ありがとうございます。緑葉さん」

「呼び捨てで良いよ、その方が話しやすいだろうし」

ぱっと見、敬語とか慣れてそうだけど、同い年にさん付けはどうも
むずがゆい。

「そ、そんな、呼び捨てなんて出来ませんよ」

やっぱり、敬語に慣らされ過ぎてるのか。

「別に良いって、むしろ俺的にはそっちの方が助かるんだけど」

「え、えっと……」

しばらく考えて、

「で、では……緑葉……くん」

そうきたか。でも十分な進歩だよな。

「よろしく、朱井さん」

「雀耶、で構いませんよ」

「じゃあ、よろしく。雀耶さん」

「はい」

雀耶さんは嬉しそうににっこりと笑った。

1st day ? (後書き)

この物語は、自分の作品『僕と記憶とメガネと精霊と』の終わりから一年後の同じ学校の話となっています。なのであっさりとその時の人物が出てきたりします。今回も名前が出てきました。ご存じの方は、おお、と思ってください。

それでは、

1st day ?

雀耶さんに教科書を見せる。それ以外特に変わった事もなく、一時限目が終了した。

先生が挨拶すると同時、あるいはそれより早く、待ってましたと言わんばかりにクラスメイト達が席を立ち、雀耶さんの席の回りに集まった。

転校生に対しての、質問攻めだ。

「うへえ、なんとか逃げれたな」

席が隣な為に一時限会場前に話をしていた俺や、南野といった隣人5人は自分の席を空けて場を提供していた。

さてと、立ちっぱなしもなんだし、「朱井さんって出席番号一番以外になった事ある？」とかどうでもいい質問してる陽斗の席にでも座ってるか、と思いそっちを見ると、

「ん？」

陽斗の隣の席の生徒が座っていた。

珍しいな、アイツが転校生に興味示さないとは。

確かにクラスの中にもあの集合——ざっとクラスの3分の2くらいか——に入っていないのも何人かいる。俺達5人とか、話しかけられないだろうと思った数人や寝てる人、日誌を書いている竜華とか。

だがその人達も視線は（寝てる人を除いて）向けているのに、コイツは唯一人前を向いていた。

俺は声をかけつつ、隣の席へ向かった。

「よっす黒石、お前は行かないのか？」

黒石は顔を上げて俺を見る。

青がかった黒髪のショートカット、その髪と似た青がかった目の男子。

黒石曜、それがコイツの名前だ。

「そんな事言ったってよ、あの中に入るのは無理だって」
器用にペンを指で回しながら答えた。

「てことは、興味はあるんだな」

「当たり前さ。ただ、あの数と……コレ書いてたからだ」

黒石は机の上のノートを俺に渡した。陽斗の席に座ってノートに目を落とすと、

「うわっ、何だよコレ」

そこには文字や記号がびっしりと書かれていた。文字は英語っぽく、記号は妙に五角形が多く見える。

子供の落書き、或いは精密機械の設計図のようにも見える。

「んー、企画書、ってのが一番近い呼び方か」

企画書……ということは。

「また、何かやる気なのか？」

黒石とは高校で出会った。一年生から同じクラスになり会話もしたが、黒石は基本的今は別クラスの生徒と共に行動して、人助けなるものを行っていた。

俺は助けてもらったことは無いが、本当に困っている生徒や先生を助けていたのだから凄い。

ただ、二年生のある日、メンバーの一人が交通事故にあってからというものの、ぱったりと辞めてしまった。そして3年生になった黒石は、事あるごとに様々な仕掛けでサプライズをするようになった。人助けしていた方から、逆に困らせる、或いは楽しませる方だ。その主催者側に、俺や陽斗といったD組男子が入っていたことも多少なりある。そしてこの企画書はまた何か、多分雀耶さんへの何かだろう、だとしたらぜひ俺も手伝いたいところだ。

「どうだろうな、分からん」

黒石はペンを止め、背もたれに体を預けた。

「え？　こんだけ書いって何もしないのか？」

ノートをペラペラと捲る。64ページある小さなノートの半分以上を黒石にしか分からない暗号で書いてある。読めはしないが、きっ

と練られた何かがびっしり書かれているんだろう。

「やりたくはあるんだがな、どうも人物の数とか、細かい所が決まらないんだ」

「数合わせなら、俺や陽斗になるぞ?」

「そりゃありがたいが、それでも後1人……いや、2人くらい欲しいか」

「じゃあ、誰か声かけるか?」

「ふむ……」

黒石は少し考え、

「……いや、いや、昼休みに心当たり会ってくるから」

「そうか、もし何かするなら言ってくれよ。力になるから」

「サンキューな、緑葉」

その時、チャイムが鳴った。集まっていたクラスメイト達が戻っていったので、俺も自分の席へ戻った。

「遅いね、二人共」

「そうだな」

時刻は既に昼休み、俺と山吹は転校生性別当ての賭けによって、外れた竜華と陽斗を待っていた。

「購買が混んでるのは分かるけど、にしても時間かかってるな」

「そうだね、やっぱり注文しない方が良かったかな」

注文すれば、それを買う為に普通より時間はかかるものだ。

ちなみに、雀耶さんは数人のクラスメイトと一緒に昼食を取っている。俺達も別にそこへ入れば良いだろうが、まさか賭けをしていたとは言えない為、少し離れた陽斗の席の方へ集まっていた。黒石は

休み時間に言っていた心当たりに会いに言ったのか、不在だ。
しかし……遅いな。

かれこれ何分待ってるか、確認の為に携帯を開いた。
瞬間、着メロが流れた。

「おお？」

絶妙なタイミングに驚きながらも発信者を確認。陽斗だった。

「何してんだ、アイツ」

着信ボタンを押して出る。

「どうした？」

『あ、彰か？』

「当たり前だろ、俺の携帯だぞ」

『だよな』

「で、どうした？」

『今さ、昼飯がそっちに走ってったから、ジャッジよろしくな』
ジャッジ？ 走ってった？ 「……ああ、そういうことか」

『という訳で、頼んだぞ』通話が切れた。

「ハルくん、なんだって？」

携帯を终いながら伝える。

「竜と虎が全力疾走してくるって、昼飯持って」

「え？ ……あゝ」

納得した山吹はうんうんと頷いた。

普通は分からないが、つまりそういうことなんだ。

その時、

ガラガラパーン！

「いよっしやああ！ アタシの勝ちだあ！」

扉を力いっぱい開けて大声と共に、1人の生徒が教室に入ってきた。

「え、え、何ですか？」

朱井さんがそれを見て驚いていたが、

「大丈夫、たまにあることだから」

隣に座っていた生徒に心配無いと言われてとりあえず落ち着いたようだ。

アッシュグレー——ほのかに黄色みを帯びた灰色——のボサツとしたショートカットの女子生徒は教室内を見回し、俺達を見つけて近寄ってきた。

アイツの名前は、しろもと じこ白本紀虎。

本人はB組だが、ある理由があつてよくD組に来ている。

「よっ、待たせたな二人とも」

右手をひらひらと振り、左手に購買のビニール袋を持って俺達の所へ。

「お前を待ってたつもりはないんだがな」

「つれないなあ、んなこと言うなって」

気にせず顔で俺の前の席に座った。

「というか、竜華はどうした？」

と言った瞬間、

「紀虎！」

入り口から竜華が早足にかけて来た。

「へへ、今回はアタシの勝ちだな」

紀虎がD組に来る理由は、竜華だ。

一年生、まだ紀虎と同じクラスだった時、二人は何かにつけて勝負をしていた。全部を見ているわけではないので詳しい勝敗数は知らないが、二人は両極端に得手不得手が分かれている。

紀虎は体力型で、100M走や幅跳びのような陸上系が得意。

一方竜華は技能型、バスケットやテニスといった道具を扱ったりチームプレイを必要とする競技が得意だ。

今回は多分、購買からここまでのレース。単純な走りなら紀虎に分があったのだろう。

だが、それにしても差があり過ぎるような。

「当たり前だ！ 途中で大菊先生に注意されていたのだからな！」
「そういことか。」

「運も実力の内ってやつだな」

「それだけじゃない、これを見ろ！」

竜華が突き出したのはビニール袋、購買で買ったものが入っていて、
「あ」

「あー！」

俺と山吹の声が被った。

袋の中身は山吹がリクエストしたパンと、瓶牛乳が入っている。あれを持ったまま走れば、衝撃で瓶が割れてしまうかもしれない。しかし竜華は慎重に持ってきて遅れてしまったのだろう。

だが、それでも走って来た為に瓶がパンを潰していた。

「わたしのパンー！」と嘆く山吹の隣で、紀虎はけらけらと笑った。

「それも運だって、アタシは袋の中身を知らなかったんだから、竜華がそっちを渡せばよかったのにさ」

いや、竜華は分かっても渡さなかったな。

紀虎がああ袋を持って走れば、瓶は必ず割れて、袋のパンは全滅していた。それを避けるために竜華はああ袋を渡さなかっただろう。おそらく、勝負自体もする気はなかったんだろうが、紀虎が袋を奪って走りだしたから仕方なく後を追う。大菊先生に見つかってしまった。という所だろう。

だが、紀虎がそんなこと知る筈もなく。

「まーいいじゃんじゃん、そんなことより昼飯食おーぜ、時間無くなる」

自分の持ってきた袋をひっくり返して机の上にパンをぶちまけた。走ってきた為、所々形がいびつだ。

「すまない奈津保……注意はしていたのだが……」

「だいじょうだよりゅーちゃん、わたし形は気にしないから」

先ほど嘆いていた山吹も竜華からパンを受け取った。

「んじゃ、いただきますーす」

紀虎は机に広がったパンを一つとって封を開け食べ始めた。
そういえば、俺の昼飯もこの中にあるんだよな。

「彰も早く食えよ、無くなるぞ？」

「あ、ちよ、待てよ」

紀虎とパンの取り合いをしながら、騒がしい昼食をとったのだった。

結果、紀虎と取り合ってパンを全て平らげた為、遅れてきた陽斗は
Uターンすることになった。

1st day ? (後書き)

この物語には、さらりと自分の別作品の人物が出てきます。しかも、かなりのキーマンで。

誰か、までは言いませんがここまで読んだ方ならお分かりでしょう。この人物がどんな奴なのかは、その別作品を読んでいただければ分かります。

それでは、

1st day ?

午後の授業が終了し、放課後となった。

俺が黒板に書かれた文字を消していると、

「彰、お前も日誌を書け、残りは私がやっておく」

竜華が日誌を持ってきた。黒板消しと交換に日誌と鉛筆を受け取り、教卓の上で日誌を開いた。

日誌には今日の感想を簡潔に書けば良いのだが、さすがは竜華、細かく書いてある。

さて、俺は何て書くか。

「緑葉くん、青川さん」

と、そこへ雀耶さんが鞆を持ってやって来た。

「どうしたの？」

「谷門先生に放課後來るように言われまして、お二人も行かれますよね？」

「ああ、じゃあ一緒に行こうか」

「はい」

雀耶さんは微笑んで答えた。

そうと決まれば、さっさと日誌を書いてしまっ……

「……ん？」

ふと、視線を上げて前を見た。そこで、見つけた。

「どうしました？」

首を傾げる雀耶さん、その後ろに並ぶ席の、窓側一番端の後ろ、つまり角の席にまだ生徒が残っていた。

誰か、までは分からない、何故ならその生徒は、机な顔をうつ伏せていたからだ。

あの席は、誰だったか？ 先週席替えしたばかりで把握出来てないんだよな。

ともかく、もう放課後だ、多分さっきの授業中に落ちたんだろう、

起こしてやった方が良いよな。

『ようこそ雀耶さん!』と一文を残して日誌を閉じ、寝ている生徒の所へ向かった。気付いた雀耶さんも一緒に付いてきた。

「えっと……この方は……」

やはり転校生な雀耶さんは分からないか、まあ俺も今分かってないけど。

とりあえず起こそう、手始めに机を叩いてみる。

「……」

無反応。眠りは深いようだ。

というか近くに来て分かったが、睡眠生徒は女子だった。

だが気にしない、彼女の為にも起こす方が良いので、俺は肩を揺さぶった。

「起きろ、もう放課後だぞ」

すると、

「……?」

もぞもぞと動き出したので手を離すと、むくりと顔を上げた。

揃えられた前髪、だかもみあげの右側だけなぜか長いというアシンメトリーな髪型をした黒髪。起きたばかりだからか、眠そうに細める目の前に、縁の無いメガネをかけている。

その顔を見て、名前を思い出した。

「おはようさん、玄平」

くろひらたけの玄平武乃。当たり前だが、クラスメイトだ。

「……」

やっぱりまだ眠いんだろう、ボーっと前を見ている。俺達はぼやけて見えているだろうか。

「玄平さん、おはようございます」

雀耶さんが声をかけると、

「……!」

完璧に目を覚まし、驚いたように目を丸くする。

そして急に慌てふためき、席の横にかけていた鞆に手を突っ込んで

ある物を取り出した。

それはキャップ式の水筒で、蓋を開けた玄平は水筒を傾けてその中身を自らの喉に流し込んだ。

その行為は、起き抜けで喉が渴いていて声が出せなかったから、ではない。

『……ぷは』

飲み終わった玄平が、口を開いた。

『おはよう朱井さん』

その姿からは予想出来ない明るく間延びした声。

「え……は、はい、おはようございます」

雀耶さんはぼかんとした顔だ。無理もない、メガネに黒髪で、物静かなイメージが強い容姿から、その真逆な明るい間延びした声が出てくれば、初対面の人はそのギャップに驚くはずだ。

まあ、玄平が喋る時は、大体驚かされるけどな。

えっと、今回の声は……

「今回は……山吹か？」

『うん、そうだよ』

声と一緒に、こくりと頷く。

「ど、どういうことですか？」

雀耶さんは今だ困り顔で俺に訊ねてきた。これからクラスメイトになるわけだし、説明させておいた方がいいな。

「玄平、説明してやってくれ」

『おっけ』

そう言って再び頷く玄平。言葉使いと動きは合わせないんだよね……

この玄平の言葉使い、それには先ほど飲んだ液体が関係している。

飲むことで他人の声を真似して使うことが出来る水。『声変えの水』略称を、『声水』こえみずという物だ。

最初聞いた時は、何だそのファンタジー設定はと思ったが、いざ飲んでみると本当に変わってしまい玄平の声真似ではないと分かる。ちなみに変わるのとは声だけで、口調は玄平自身が変わっている。

では何故、そんな物を持っているのか、それにはある一人の生徒が関わっている。

玄平武乃、彼女が出席番号順で席に並ぶと、前に黒石が来る。

黒石は何かを企む度、どうやって作ったんだという道具をよく持つて来ていた。中には声水のような、言うところの魔法じみた機能を持つ物だっであつた。

一度、どうやってこんな物用意したんだよ、と訊いた時、黒石はこう答えた。

『俺さ、魔法使いだから』まさかそんな訳ないだろ、と笑ったのを覚えている。結局その時ははぐらかされてしまいタイミングを逃したが、そんな魔法じみたアイテム生成家自称魔法使い黒石の席が目の前にある。気まぐれで渡して、玄平がそういう物を持っていたも別におかしくない。

『これからよろしくね、さくちゃん』

さくちゃんとは、昼休みに山吹が考えた雀耶さんのニックネーム、まだ誰もそう呼んでないが、聞こえていたのか玄平は山吹の声でそれを使った。

「はい、よろしくおねがいます」

雀耶さんと玄平は会話を始めた。と言っても聞くだけなら雀耶さんと山吹の会話に聞こえるが。

声はともかく、玄平は真似た人の口調まで似せる。そんな変わった特技のせいか、あるいは本人の性格故か、玄平はあまり人と関わらずクラスでは孤立している方だった。

質問すれば、声を変えて返す。会話を持ちかければ、声を変えて応じる。と、完全な無口ではないので特に問題は——声を必ず変える事を除いて——無い筈だが、自らそれをしようとは思わないらしい。

だから、玄平がこうして誰かに声をかけて話をしているのはとても珍しい光景だ。

これがもし、玄平本人の声だとしたら……珍しい、以前の大問題だ

な。

日直でペアになった生徒を始め、担任や先生にまで、自らの声を聞かせたことが無いらしい。

それくらい、徹底していると考えた方が良いのか、それとも、かなりの変わり者として見た方が良いのか……

『ん？ わたしの顔に何かついてるの？』

じっと見ていたせいか、玄平は俺を見て首を傾げた。

「いや、別に、それより時間大丈夫か？」

壁に掛かっている時計を指差す、現在の時刻、15時43分。

『あ！ いっけない、部活行かなく……』

急に言葉を止めて慌て出し、鞆に教科書や筆箱を詰めて席を立ち、入り口へ、

「玄平さん、また明日です」

雀耶さんが声をかけると、

「……」

こちらを向いて手を軽く振り、一言も言わずに行ってしまった。

「玄平さん、途中から声を出さなくなりましたけど、どうしたんでしょう？」

「多分、声水が切れたんだよ」

服用した量や声を出すことで変えていられる時間が異なるらしい。さっき言葉の途中で切れたんだろう。

「彰、朱井さん」

日誌を持った竜華が現れた。

「今のは、武乃か？」

同じ教室内にいたから聞こえていたよな。

「つうか、竜華と玄平って仲良いのか？ 今名前呼びしたよな？」

「一年生から同じクラスだ。ある時本人も名前で呼んでくれと言っていた。彰だってそうじゃないか」

そういやそうだった。

「だが、本人の声は聞いたことは、無いな」

一年生の時、その頃は紀虎も同じクラスだった。

最初のホームルームでの自己紹介の時、玄平は――

『玄平武乃です！ 皆よろしく！』

まさかの声変えを披露して周りを驚かせた。特に驚いていたのは、その後と同じように同じ声で自己紹介をしようとしていた紀虎だろう。まあ、その言葉と裏腹にただ頭を下げるという動作をしたときにはもう違和感満載だったけどな。

「玄平さんって、ずっとそうなんですか？」

「ああ、教科書の音読から英語の発音まで。武乃本当の声を知る者は学校にもいないという話だ」

……ん？

「そういや……俺、玄平の声聞いたことあるかも」

「なに！？ それは本当か！？」

竜華が詰め寄って訊いてきた。それだけ珍しいことなんだが。

「あれは確か……文化祭の時だったと気が……あれ？」

なんか、よく思い出せない。

「……悪い、忘れちゃった」

「なっ！？ なぜそんな大事なことを忘れるんだ！」

そこまで驚くことないだろうに。

「そんなに大事か？」

「当たり前だろう！ 武乃の声は流れ星くらいの貴重度だぞ！」

天体レベルかよ。

「つうか、竜華にしては珍しい言葉が出てきた」

「っっ！？」

途端に竜華の顔が赤くなった。自分で言っただけで似合っていないのを悟ったな。

「流れ星に願えば、玄平の声が聞こえるんじゃないか？」

「も、もうこの話は無しだ！ 早く先生のところに行くぞ！」

「へーい」

俺達は職員室へと向かった。

……しかし、玄平の本当の声を聞いたことがあるのは事実だ。
確か、一年生の文化祭だったと思うが……妙に思い出せないな。
こうなったら、玄平本人に聞いてみるのが一番だな。

思い出せるかもしれないし、ひょっとしたら、運良く玄平本人の声を聞けるかもしれないから。

「はぁー、疲れた……」

鞆を机に放ると、そのままベットに倒れこんだ。

学生寮、基本2人一部屋なのだが、俺は1人でこの部屋を利用して
いる。別に仲間外れにされた訳じゃない、これにはちよつとした理
由がある。

この学校、去年までは全寮制だった。しかし今年に入ってここへの
進学を考えた者が多く、なるべく受けれた結果、全学年で学校から
家までの距離が近い生徒には家から通うことを義務付けられたのだ。
知っている顔で言えば、陽斗と山吹、後は紀虎と……あ、玄平もそ
うだったかもしれない。

とまあこんな感じで寮生の数を変えていったところ、俺が1人余っ
たということだ。

だから男子の転校生が来たら学年関係なくルームメイトになるとい
う約束付きだが、そうそう来るものじゃなく、今も1人だ。

本来二段ベットになる物の二段目を外して一段になったベットの
上で寝転がりながら、ふと、今日の出来事を思い出した。

今朝は日直の為、遅れないようにと竜華が迎えに来た。

ちゃんと礼言ったはずなのに、なんで怒られたんだろうか？

ホームルームの時、転校生として紹介された雀耶さんが隣の席になった。

物腰が低く、男女クラスメイトに対して分け隔てなく接していた。すぐにクラスになじむだろう。

昼休みには、紀虎が現れた。

購買で出会った竜華との勝負に勝ってご機嫌だったな。

放課後、寝ていた玄平を起こした。

久々の声水を聞いて、昔本物の声を聞いたことを思い出す。本人に訊こうと思うが、あの性格だ、結構難しいだろうな……

「……結構、充実した一日だったかもな」

何もない日は本当に何も無く過ぎていく、だが今日は日直から始まって、ホームルーム、昼休み、放課後と出来事が多かった。

「……楽しめるのは、今しかないもんな」

高校の三年生、つまり来年には高校を卒業して、皆、大学や就職、それぞれの道に歩むこととなる。

正直言ってしまうと、まだ先を決めてない俺は、遅い部類だ。クラスの中にはもう先を決めている者も数人いるというのに。まだそれすら決めてない、全く焦ったいない俺は、ある意味では問題なのだが……

「……」

焦ってないのは問題なのかもしれない。

けど、一生の内に高校三年生は今しかない。

それを、潰したくはないだろう……？

1st day fin ↓

1st day ? (後書き)

一日目が終了しました。

この日は、主要の登場人物を紹介する話で、彼らを中心に秋の物語は進んでいきます。

それぞれが自分の道を選ぶ三年生、そこでまだ選んでいない一人の少年。

彼が皆と関わり、選んでいくのはいったいどんな道なのでしょうか。

それでは、

2nd day ?

一夜明け、日直ではない今日はいつも通りの時間に置き、数分で準備して寮を出た。

昨日より遅いといっても十分そこで、心無しか向かう生徒が多い気がするが、まあそれだけだ。

季節は秋、落ち葉が散っていて、同じ方向で、学校という同じ場所に向かうだけで、普段と変わりとは……

「緑葉くん！」

「ん？」

名前を呼ばれた。立ち止まって振り返ると、

「おはようございます、緑葉くん」

雀耶さんが後ろからやって来て、俺の隣に並んだ。

「雀耶さん、おはよう」

「はい」

並んで歩き出す。

「学校には慣れた？」

「さすがに一日では無理ですよ」

「そりゃそうだ」

「ふふっ、ですが皆さんお優しいので時間の問題だと思います」

確かにクラスメイト達は雀耶さんに優しいし、雀耶さんも誰とでも別け隔てなく話してるから、そうだろうな。

「じゃあさ、次の休みにでも街案内するよ。複数人で遊びながら」

「それはありがとうございます」

俺の提案に雀耶さんは微笑んだ。

これで決定だな、と思っていたら、

「ですが、わたし、この街には少し詳しいんですよ？」

「え？ そうなの？」

まさか転校生の雀耶さんが転校先の街に詳しいとは。

「事前に調べたとか？」

「いいえ、確かにわたし転校して来ましたけど、この街が地元なんです」

「へえー」

親の都合とかで遠くに行ってたんだろうか。

「小学校卒業まではこちらで過ごして、中学へ行くと同時に両親の都合で引っ越したんです」

あっさりと教えてくれた。「ということはさ、雀耶さんと小学校が同じだったのが今同学年にいるかもしれないってことだよね」

通学が楽な為に地元の高校を受けようと思う人、一人くらいいるそうだな。

「そうかもしれませんね……ですが」

急に、雀耶さんの声のトーンが落ちた。

「どうしたの？」

「……実はですね、子供の頃、ちょうど小学生の間の記憶が思い出せないんですよ」

「え……？」

記憶が、思い出せない？

「わたし、中学生の時交通事故に合いまして……その時に頭を強く打ったらしく、昔の記憶が思い出せないところがあるんです」

「……」

交通事故で記憶喪失。知り合いに本当にそうだった奴を知っているから、信じられる。

まさか、雀耶さんもそうだったなんて……

けど、分からない事が2つある。

一つは、

「小学生の時だけなの？」

「はい……何故かそこだけ靄がかかったようでして、何か、とても大切な思い出もあると思うんですけど……」

雀耶さんは顔を俯かせてしまった。それはそうだ、こんな事言いた

い訳が無い。でも俺が思い出させてしまった。

何か、フォローしないと……

「だ、大丈夫だよ、きっと」

「え？」

少し顔が上がり俺を見た。

「記憶喪失っても、完璧に忘れた訳じゃないんでしょ？ だったら何かをきっかけに思い出せるさ、きっと」

「緑葉くん……」

雀耶さんの顔が真っ直ぐ上がり、

「はい、ありがとうございます」
にっこりと微笑んだ。

その顔に、思わずドキッとした俺は、

「い、いや、別に、普通のことだよ」

冷静を保ちつつ、

「と、ところでさ」

もう一つの疑問について訊いてみた。

「はい？」

「何でその話、俺にしてくれたの？」

今分かったように、そんな軽い話じゃない。一日そこら会話しただけの転校先のクラスメイトに話せるようなものじゃない筈だ。

「それはですね——」

雀耶さんは一拍置いてから、答えてくれた。

「転校先の学校で、初めて仲良くなったお友達ですから」

二時間目は体育だった。

この学校では体育や家庭科等の授業は二組合同で行っていて、A組

はC組と、俺達D組はB組と行っている。

夏休みが終わってから内容は男女別の球技、場所は体育館でB、D男子組はバレーボールのネットを張っている。

その中、ボールが飛ばない為に仕切りのように張られたネットの向こうでは、既に勝負が始まろうとしていた。

「勝負だ！ 竜華！」

B組の紀虎の声が響いた。少し肌寒くなってきたこの季節に体操着の半袖とハーフパンツという格好で指さした先には、同じく半袖に長ズボンの竜華が立ってる。

「受けて立とう」

手に持ったバスケットボールを弾ませながら答えた。

毎回思うのだが、竜華は紀虎との勝負を楽しんでいる気がする。けど、一度そうだと訊ねてみたら、

「ち、違うぞ！ 私は別に楽しんでなどいないからな！？」

と声大きく否定していたから、違うらしい。

けれど今日や昨日のも含め、竜華は紀虎からの勝負は断らないんだよな、楽しんでないなら、たまには断ればいいと思うんだが。

……ふと、紀虎が竜華に勝負を挑み始めたきっかけを思い出してみた。

あれはそう、高校一年生になって初めての体育の授業の日、内容は男女混合のバスケット。

クラスの中で2チームを作り、計4チームでの総当たり戦が開始され、俺達のクラス同士での試合になった時、相手チームの中に一人で突っ走って点を取るワンマンプレイヤーがいた。

言わずもがな、それが紀虎だった。

「オラオラあー！」

一人でドリブルをしながらこちらのディフェンスをかわしてゴール前、後一人となった。

「このまま決める……ぜ？」

だが紀虎はシュートを決められなかった。ゴール前最後のディフェ

ンスに、ボールを奪われたからだ。

「なにっ!？」

紀虎が振り向くころにはボールはパスの連続を受けてからゴールへシュート。こちらに点が入った。

「おお、アンタ、なかなかやるな!」

紀虎が自身からボールを奪ったディフェンスに声をかけた。もう分かると思うが、そのディフェンスが、竜華だった。

「バスケットボールとは個人競技ではない。一人で走るからこうなるのだ」

竜華は腕を組み、紀虎に指摘をする。

「でもよ、個人技は必要だろ？」

2人はそのまま会話を始めてしまった。

「確かにそれ也需要だ。だが授業として行っている限り、重要なのはチームプレーの向上なんだ」

「ふーん、面白い奴だなアンタ、同じクラスだったよな」

「青山竜華だ」

「アタシは白本紀虎。よろしくな、竜華」

「ああ、よろしく頼む、紀虎」

この時すでに2人は互いを名前で呼んでいた。

そして固い握手を交わした後、

「つうわけで、竜華は今日からアタシのライバルだ!」

紀虎は竜華にライバル宣言をしたのだった。

「……は？」

いきなりの理解不能宣言に竜華は首傾げる。

「だから、ライバルだって、強敵と書いて読むアレだよ」

実際は、好敵手と書いてライバルだ。それは漫画とかの中のものだ。な。

「いやそれは分かるのだが、何故ライバルなんだ？」

「そりゃあ、竜華が強い敵だからさ」

「漢字の意味ではない! 何故ライバルにならねばならないのかと

訊いているんだ!」

ちなみに、2人がこうしている間もバスケの試合は続いている。両チームのエースが抜けたので、わりと変わらないバランスの勝負になっている。

しかし、竜華が怒鳴ったのを聞いて竜華側の一人……まあ俺だ、が抜けて2人に近寄った。

つか、全部聞いてたんだよな。

「どうどう、落ち着けよ竜華」

「彰!　しかしな……」

「お?　アンタは?」

「緑葉彰だ、竜華とは幼なじみってやつでな」

「おーじゃあちようど良いや、ちよっと説得してくれよ」

「なんでそうなる、怒らせたのお前だろ」

「いいからいいから、な?」

調子のいい奴だな、まあ元々そのつもりで来たんだ。

「竜華、とりあえず落ち着けて」

「そうは言ってもだな、いきなりライバルと言われて落ち着けるか?」

とりあえずそこまでヒートアップはしないと思うが……まあいいか、クールダウン対策はある。

「竜華、知ってるか?」

「何をだ?」

「強敵と書いてライバルって読むのにはな、もう一つの読み方があるんだ」

「もう一つの読み方?　何だそれは」

よし、かかった。

「トモ、って読むんだ。ライバルにして、友達って意味になるんだぜ」

「!?　そ、それは本当か?」

「ああ、強敵と書いてライバル。そして強敵と書いて、トモだ。」

「そ、そうか……トモ、友達か……それなら、悪い気はしないな」
「だろ？ 白本と竜華はライバルになった瞬間、友達になったんだよ」

「おお……」

竜華の顔がニヤけた。別に友達が少ない訳ではないが、相手側から友達になってくれと言われると竜華は毎回こうなるのを、俺は知っている。

その時、会話してるだけの俺達を見た先生が笛を鳴らして注意してきた。

「む、不味いな、戻るぞ」

クールダウンした竜華が一足先に元のポジションへ戻っていく、俺も戻ろうとすると、

「ナイスだぜ、緑葉」

紀虎に呼び止められた。

「昔から竜華を知ってるからな、予想通りの反応だったさ」

「へえー、でもよ、あれをあっさり信じるのはスゴいな」

「まあ竜華だからな」

アイツは漫画読まないから知らないんだろう。

「ま、説得してくれてサンキューな。同じクラスだし、仲良くしようぜ」

「紀虎でいいぜ、アタシも彰って呼ぶから」

これが俺と紀虎の出会い、そして、2人が戦い始めた理由だ。

2nd day ?

昼休みになった。昨日に続き雀耶さんの周りではクラスメイト達によるランチタイムが開かれている。

俺もまた昨日と同じで、陽斗の席がある方へと来ていた。メンバーは陽斗、竜華、山吹と、俺の四人。席が近くにある黒石は不在だ。紀虎は……まあ多分来ないだろうな。体育で竜華に負けて悔しがってたし。

というわけで、いつもの四人なわけだが……ふむ、もう一人増やしてみるか。

席の方を見ると、案の定そこに座っていたのを発見。

「おい、玄平、一緒に食わねえか？」

手を振って玄平に声をかけてみた。

「……？」

予想外だったのだろう、玄平は無言のまま首を傾げた。

「お、おい彰、お前何考えてんだよ」

それを聞いた陽斗が俺に追及してくる。

「別にいいだろ？ 仲が悪いわけじゃねんだし」

「ま、まあそりゃそうだけどよ……」

ただ、あまり関わりたくは無いらう。

「……」

竜華は気づいたようで、俺を一瞬見るとすぐに視線を戻した。

そう、これは玄平の声を聞こうという作戦の一つ。声を聞くにあたって、一番の近道はやはりちゃんとした友達になることだろう。別に誰かと話せないというわけではないが、それはクラスメイトであるからで、友達とは異なる。まさか本当の友達に対しては、玄平も声水を使わずに話してくれるだろう。

というわけで、まずはこうして気軽に昼食を共にしようという訳だ。
「のんちゃん、おいでよ」

それを知らない山吹は純粹に玄平を呼んでいる。のんちゃんとは、玄平のあだ名だろう。

「……」

少し思案顔になった玄平はやがて、こくりと頷くと昼食の入った袋と水筒を持ってきた。

近くにあった机をくっ付けて俺と竜華の間に席を作ってそこに入った。

席についた玄平はまず、水筒の中身をフタに注いで一飲みした。

そして、

『お誘いありがとうございます』

雀耶さんの声で、お礼を言った。

あの水筒の中身、声水だったのか。

「お、久々に聞いたよ」

山吹が声水に驚いている。まあ滅多に話さない玄平だからな。

「ねえねえ、わたしにも少しちょうだい」

『はい、良いですよ』

玄平はフタに声水を注ぎ、山吹へ手渡す。

結構重要な物だと思うが、案外簡単に別けてくれるんだよな。

受け取った声水を、山吹は一気に飲み干す。

『ぷはあ、ありがとう、のんちゃん』

すると山吹の声が変わり、竜華の声になった。ただし、口調は山吹なのでスッゴい違和感満載だ。

『おお！ りゅーちゃんの声だ！ すごいよりゅーちゃん！ りゅーちゃんの声だよ！』

驚く山吹だが、声水を知らないで竜華のあだ名を知ってる人が聞けば、自らのあだ名を自分で呼んでいるようにしか聞こえない。

「な、奈津保、分かったから大声で言わないでくれ」

現に竜華は恥ずかしそうだ。ただこの中でならその条件に当てはまる人はいないから大丈夫だろう。

『じゃあみんなも変えればいいんだよ、そうすれば誰がダレか分

からなくなるから問題なし!』

いやそういう問題じゃないだろう山吹。

『皆さんもいかがですか?』

玄平は席を立てて自分の席に戻り、鞆の中から紙コップの重なった物を持ってきた。用意周到だな。

「いいのか? 限りがある物だろ?」

『ご心配な…』

玄平は途中で口を押さえて言葉を止めた。声水をフタに注ぎ、一気に飲み干す。

『ぷはっ……ご心配なく、まだ沢山ありますから』

玄平は水筒を振って中身がまだある事を示した。

『ほらりゅーちゃん、りゅーちゃんも飲もうよ』

「わ、分かったから奈津保、その声であだ名を連呼しないでくれ」
こうして、俺達四人は声水を口にし、声が変わった。

『みんなで変わるとおもしろいね』

山吹は竜華の声、普段の竜華からは想像出来ない言葉使いが多く飛び出して来る。

『オレはあんまり変わってねえけどな』

陽斗は俺の声、元々あまり変わらないから対した変化は見られない。

『う……やはり、妙な気分だな……』

竜華は陽斗の声、元々アルトよりの竜華だが、さすがに男子の声になると変化が分かるな、雰囲気はあまり変わらないが。

そして、俺はと言えば……

『そーいや彰、次の授業何だったけ?』

『……』

『なあ、彰?』

『……』

自分の声に呼ばれるのは妙な気分だな……

『聞こえてんだろ? 彰』

そっちこそ、次の授業実は知ってるだろうが。

けど答えないとそれまで訊ねられ続けられるだろうしな……

『……がく』

『あ？ 何だって？』

絶対聞き取れてた筈な陽斗は手を耳に当てて再度訊ねて来やがった。
チクシヨウめ、昨日の仕返しか？

『数学だよ！ 数学！』

『あっはっはっ！ やべ、面白過ぎる！』

俺は山吹の声が変わっていた。まあ今までの流れを見るに残ったのはそれだけだったけど、まるでヘリウムガスを吸った後みたいだ。

『あっはっはっ！』

陽斗はそれを聞いて大笑い。声は俺のなので俺が笑ってるようだが、笑われてるのが俺だから余計ムカつく。

だからって何か言おうものなら、更に笑われるだけだ。

くそ、早く効果切れてくれ。

『ふふふ、皆さんお楽しみのようで何よりです』

玄平まで笑ってる……え？

……玄平が、笑った？

『ですが藍田さん、緑葉くんを困らせてはいけませんよ』

しかも、俺を氣使った？

今は雀耶さんの声と口調だが、あの基本無表情な玄平が口に手を当てて笑い、俺をかばった。

今まで他人にそういうことをした所を見たことは一切無かった玄平が……

『でもよ、こんなに面しろ……あ』

陽斗の声が元に戻った。次いで山吹、竜華、俺の順番で効果が切れた。

「ちえ、もう少し楽しめると思ってたんだけどな」

『効き目の切れる時間は人それぞれですからね』

昼食の水として声水を飲んでいた玄平だけが今だ声が変わっている。

「私としては、早く戻れて良かったが」

「俺もだ、つくづく高い声が自分に合わない実感したぜ」

その時、昼休み終了のチャイムが鳴った。雀耶さんの所に集まっていたクラスメイト達も各々席に戻り始める。

『昼休み終わってしまいましたね、すみませんがわたし、少々やらなくてはいけないことがありますので先に失礼します。お誘い、ありがとうございます』

本当に雀耶さんが言いそうな台詞を残して、玄平は席を立って荷物を持ち自分の席へ戻って行った。

『……』

それを確認後、俺達は肩を寄せ合い、玄平に聞こえないよう小声で話した。

「今玄平の奴、笑ったよな？」

「うん、しかも普通にだよ。しぐさだけとかじゃなくて」

普段の玄平なら、声と口調は変えるが笑いのしぐさは一切なく無表情。だがさっきのは、どう見ても笑った顔をしていた。

「なんだ？ 今日これから雪でも降るのか？」

「それはまだ季節的に早いと思うよハルくん」

「いや、奈津保、今のはそういう意味で言ったわけではないと思うんだが……」

それぐらい、珍しいということだ。

いったい何がそうさせたんだ？ 昼飯に誘ったことか？

もしその程度で良いなら、これからも誘ってるか。

ひよっとしたら、もっと俺達と仲良くなれば、本当の玄平の声が聞けるかもしれないからな。

特に何のへんてつも無く、午後の授業が終わり放課後となった。
用事も無いし、誰か誘って帰るか。と思って教室内を見回している
と、陽斗を見つけた。

「陽斗、帰ろうぜ」

「あ、ワリい彰、オレ先生に呼ばれてんだ」

「？ 何かしたのか？」

「行きたい大学がな、今のままじゃヤベえって言われてな」

「……」

大学か……

「ん？ どうした彰？」

「……いや、別に、じゃあ他当たるわ」

「おう、じゃあな」

陽斗は鞆を持って教室を出て行った。

「……」

そうか、陽斗も先の事決めてるんだな。

それに比べて、俺は……

……やめよう。今考えるのは、誰かと帰る事だけだ。

「緑葉くん」

後ろから声をかけられた。声で誰か分かったけど、振り返り答える。

「どうしたの？ 雀耶さん」

「良ろしかったら一緒に帰りませんか、わたし達と」

見れば雀耶さんの隣には竜華が立っていた。

「て、いつの間に2人はそんな仲良しに？」

覚えている限り2人が話しているのは昨日の放課後の時だけだ。

「今日の体育の時、少しな」

「竜華は凄いですよ、チームをまとめる統率力に的確な指示、加えて自身も運動神経抜群なんですから」

「いや、私一人が凄いわけではない。雀耶達皆が頑張ってくれたからの勝利だ」

「……」

2人共、既にお互い名前呼びするほどの新密度ですか、竜華はともかく雀耶さんの名前呼び捨て呼びとか珍しすぎる。

今日の体育にながったんだ……

まあ、答えは出ないのは分かってる。今はせつかくのお誘いを見事にしない事だ。

「帰ろうか、二人とも」

鞆を肩にかけて先陣を斬った。

その時、

「朱井さん、ちょっと良いかな？」

雀耶さんと呼びとめる声、三人でそちらを見れば、そこには黒石がいた。

「わたし、ですか？」

「うん、ちょっとコッチへ」

黒石の後に続いて雀耶さんは教室の端へ行ってしまう。

「何をしているんだ？」

「さあ、サプライズの説明とかじゃねえか？」

黒石が何か書いていたのは知っている。多分それに関わる何かだとは思う。

2人は小声で何かした会話している。こちらにその声は聞こえない。

「—————！？」

少しした時、雀耶さんの顔に驚きの表情が見えた。

「—————？」

「—————」

それから一言ずつ話すと雀耶さんは俺達の所へ、黒石は教室を出て行った。

「すみません2人とも、わたし用事が出来てしまいまして、一緒に帰れなくなってしまうました」

申し訳なさそうに頭を下げる雀耶さん。

「そうか、だが用事ならば仕方が無いな」

「すみません、竜華、緑葉くん、また明日です」

再び頭を下げ、雀耶さんは教室を出て行った。

「彰、仕方が無いから、私達だけで帰るぞ」

「ああ、そうだな」

用事とは、明らかに今の黒石との会話が関係しているだろう。今だって雀耶さん、黒石が行った方向に向かってった。

雀耶さんのさっきの表情も気になるし、黒石の奴、何を吹き込んだんだ？

2nd day ? (後書き)

ここを書き終わってから冷静に考えましたが……

小説だと声が変わったとか分かりにくい！ と思いました。

しかし、これはこれで必要な伏線ですし、分かりやすいようにしておいたので、どうかご勘弁のほどを。

それでは、

2nd day ?

さっきの表情も気になるし……黒石の奴、何を吹き込ん……

「彰、おい彰！」

「!？」

竜華の声に気づいた俺の正面に電信柱があった。

「あぶね!？」

とっさに避け、直撃を待逃れた。

「全く、すっかり前を見て歩かないからそうなるんだ」

竜華に呼ばれてなけりゃぶつかってたな。

「サンキューな、竜華」

「なにか考えごとか？」

「ああ、さっきの雀耶さん、黒石と何話してたんだろうなって」

「黒石か……また何かよからぬことを考えていなければ良いのだが……」

黒石のサプライズ。サプライズ故に、好まない人もたくさんいる。

大半が先生。D組のクラスメイト達は基本楽しんでるが、反対派もごく一部、竜華はその筆頭と言っている……

「でもきつと雀耶さんの歓迎会とかじゃないか？ 竜華もそれなら協力するだろ？」

「むっ、それならば……しかしだな……だが雀耶の歓迎会ならば……むむ……」

ただ竜華はその内容によっては協力してくれる。半、反サプライズ派と言った方が良いかもな。

「もし動員要請があったら声かけるか？」

「っ……こ、この話は終わりだ！ そもそもサプライズをする相手にそれを伝えてはダメだろう！」
「そういえばそうだな。」

「じゃあ、あの会話は何だと思うよ」

「今の時期を考えると……進学の話とかではないか？」

「……」

進学……

「彰？」

「……なあ、竜華は高校卒業したらどうするんだ？」

「私か？ 第一志望は進学だ。後を継ぐために必要な事を学ばなくてはな」

竜華の実家は中華料理屋だ。子供の頃は俺もよく行っていた。

「調理師免許も必要だが、店を経営するとなれば経理の能力もいる。それらを学べる大学をすでに調査済みだ」

そうか、竜華ももう、先を決めてるんだな……

「そういう彰はどうなんだ」

「俺か？ 俺は……」

まだ、決めてない。これはしたくない。というのしなければ、これがかしたいというものもない。

このままなら、卒業と同時にアルバイトになる。バイトはしてるからニートにはギリギリならない。

「まさか、まだ決めてないのか？」

「……」

俺の無言で竜華は理解したらしい。

「彰、余計な世話かもしれないが、この時期に決めていないのはマズくないか？ せめて進学を……」

「別に良いだろ、竜華に迷惑かけてねえし」

つい、怒気の隠った声が出てしまった。

「うっ……」

急に俺が怒ったように見えたからか、竜華はたじろいだ。

「……悪い、また明日な」

空気が悪くなりすぎた。俺は竜華に謝りつつ、その場から逃げたい一心で走り出した。

「あ、彰!!」

後ろから竜華の声がしたが、止まることなく、俺は寮まで走り続けた。

「マズったかな……」

寮の自室、息切れながらも入った俺はそのままベッドに飛び込んだ。竜華の言葉は正論だ、何も間違っていない。だが、そういう正論を述べられてしまうというイラッとしてしまうという人の性だとかないとか……

「……ダメだ、考えるほど罪悪感が……」

明日、竜華にもう一度ちゃんと謝ろう。謝る。として、他の事を考えよう。

朝、雀耶さんと出会って一緒に登校した。

実は記憶喪失だという凄いカミングアウトをされたが、それは仲良くなれたってことだよな。

本日の紀虎対竜華は、竜華に軍配が上がった。

その時にふと最初の勝負を思い出し、その頃から紀虎とはお互い名前呼びになった。

昼休みには、玄平を昼食に誘ったらあっさりと承諾した。

声水には困らされたが、そのおかげで玄平の笑みというのを始めて見た。

そして、放課後には竜華と……

……結局、ここに至るのか。

明日、必ず謝る。とりあえずこれだ。

だが、先も考えなくちゃいけないよな……

「……昔は、何を考えてたんだろうな」

小学校や中学校の卒業アルバムには、将来の夢というのを書いた覚えがある。

内容は覚えてないが。少なくとも、その時の俺がなりたかった職業が書かれている筈だ。

今度、家に帰った時に見てみよう。

そう、もう少ししたら、秋休みだから……

2nd day fin ↓

2nd day ? (後書き)

二日目が終了しました。

そろそろ、主人公の動く理由が分かってくるようになってきました、彼を中心に起動し始める『秋』。

そこに関わり、起動の最終スイッチを押すのは――――

それでは、

3 r d a y ?

登校中、風に舞う落ち葉を見てみると、秋だなーと思う……って、そんな現実逃避してる場合じゃない。

「いないか……」

竜華を探して、いつもより早めに寮を出た今朝、だが結果はご覧の通り全く見つからない。

回りには普段登校していても見かけない生徒ばかり、

「ん？」

その中に、見知った後ろ姿を見つけた。

へえ、あいつこんな早くに学校行ってるのか。

俺はかけよって声をかけた。

「よっす、紀虎」

「ん？ おお、彰、はよっす」

紀虎は鞆を肩にかけ、片手で文庫サイズの本を持っていた。カバーがかかっている、何かは分からない。

「彰もこの時間だったのか」

「いや、今日は用事でな、いつもはもう少し遅い」

「用事って何だ？」

「それはな……」

俺は紀虎の隣に並んで歩き、昨日あった事を話した。

「ふーん、卒業した後のことか」

「紀虎はどうするんだ？」

「アタシは大学行く、スポーツ推薦で陸上が有名な所にな」

そうか……紀虎もちゃんと先の事考えてるんだな。

「彰も大学行くなら早く決めた方が良いいぜ、推薦もらえなくなる前にな」

「そうだな」

とは言っても、そう簡単に決められるものじゃない。その選択が、

そのまま将来の自分に直結するかもしれないんだからな。
せめて何か、目指す理由でもあれば……

「……？」

ふと、紀虎が持っていた本が気になった。

妙な空気（俺だけだが）になってしまったので、話題を変えよう。

「何の本読んでたんだ？」

「ん？ コレだよ」

紀虎はページをめくって目次を俺に見せた。

そこには、こう書かれている。

『常敗ピンチヒッター』

「……なんだソレ」

聞いたことない題名だった。感じを見るに、ライトノベルっぽいが。

「え！？ 彰コレ知らねえの！？」

何故かスツゴい驚かれた。

「あ、ああ……」

引き気味に答える。

「はー、まさかジョウハイ知らねえ奴がいるとはな」

ジョウハイ？ あ、略称か。

けどオーバーだな、その辺歩いてるのに聞けば一人二人は知らないものもいるだろ。

「そんなに面白いのか？」

「マジヤベェよ！ アタシあんま小説って読まねえけど、ジョウハイはハマってたな」

紀虎は『常敗ピンチヒッター』の面白さを語った。

なんでも、主人公は野球部の監督。その野球部には一人、万年雑用をさせられる部員がおり、主人公はその部員には隠された力があると信じてピンチヒッターで出して……負ける。

その繰り返しなのだから。……聞いたただだと全然面白さが分から

ねえんだが。

「今度貸してやつから、絶対読めよ！」

「あ、ああ……」

気押されて返事してしまう。

しかし、ここまでイキイキした紀虎初めて見た気がしたな。

結局竜華は見つからず、紀虎と共に登校したのだった。

よくよく考えれば、竜華は同じクラスなのだから教室で待っていればいずれ来るに決まっていた。

もう少し考えてから行動するべきだったな……

という訳で、俺は教室に到着。すでに来ていたクラスメイトと挨拶した後、自分の席へ、後は竜華が来るのを待つだ——

「おーい、緑葉ー」

——誰かに呼ばれた。

声がした入り口を見ると、先生が俺を見て手を振っていた。

俺は席を立ち、先生の所へ。

「なんですか？ 大和先生」

「ああ、ちょっとな」

大和先生。確か3Cの担任で、男性にしては珍しく見える家庭科の教師で、先生にしては珍しい名前呼びを強要する……というか、名字知らない。

最初の自己紹介の時も、黒板に大和って名前しか書かなかったし言わなかった。他の先生に聞いても答えてくれないし、ある意味、こ

の学校で一番謎が多い先生だ。

「一限で使う資料、運んどいてくれないか？」

そういえば今日の一限家庭科だったな。でも、

「なんで俺なんすか？」

「だって緑葉、配当係だろ？」

「あー」

そうだった。俺配当係だったな。

配当係とは、今のように授業で使う資料とかを教室に運んで配ったりする、先生のパシリみたいな係だ。

「そこはせめて手伝いって言おうぜ？」

「最近無かったんで忘れてました」

配当とは言っても、普通の授業でそんな大きな資料そうそう使わないから楽出来るだろうと思ってた係だからな。案の定、夏休み明けてから今まで係は無かった。

「とりあえず頼むわ、一人だと多いだろうからもう一人と一緒に来てくれ」

「もう一人？」

係は2人一組、男女でなるので、配当係の女子がいるわけで……
……配当係の女子って誰だっけ？

「それも忘れたか」

「はい、誰でしたっけ？」

「俺も忘れた。だから緑葉を呼んだんだ」

じゃあ探しようが無いじゃないですか……

と、その時、

『私です』

後ろから竜華の声が聞こえた。

そうか、もう一人の配当係って竜華だったのか……って。

竜華！？

マズイ、確かに待ってはいたが、まだ心の準備が出来てな……

「じゃあ頼むぜ緑葉、玄平」

……え？

俺は隣に並んだ生徒を見た。

『どうした？ 行くぞ』

竜華の声、に変わっている玄平だった。

そうか、もう一人の配当係って玄平だったのか、忘れてたぜ……

「……って、なんつうタイミングでその声なんだよ……」

『ん？ どうかしたか彰』

「いや、別に……」

まさか玄平にアレを言うわけにはいくまい。

俺達は無言のまま大和先生の後に続いて家庭科室へ到着。

「それじゃあ頼むぜ」

資料を受け取り、半分ずつ持った俺達は来た道をUターンして教室へ向かった。

「……」

『……』

その間、無言。

周りの騒がしさがよく耳に届くが……つまりかなり気まずい。

玄平が自分から話す奴じゃないのは知ってるし、かといってこのまま無言は耐えられない。係の度にこんな感じだったのか？

『ん？ どうしたのだ、彰』

見ていたのを気疲れ、玄平は首を傾げた。

「あ、いや……」

さっきも訂正したばかり、さすがに二回目はまずいな。何か話題を……

「く、玄平は、卒業したらどうするんだ？」

『卒業したら？』

しまった、つい竜華の声からそんな事訊いてしまった。

まさか玄平が答えてくれる訳がないのに。

『そうだな、一応は進学だ』

……あれ？

『詳しく話すと難しいが、生物学方面の大学だ』

最初は言葉も竜華の真似かと思ったが、内容が違う。これは本当の玄平の卒業後の話だ。

というか、生物学とか勉強難しいんじゃない？……ひょっとして玄平、頭良い？

『一つ、やりたい事があってな、それにはその道を進むのが良いだろうと思ってな』

へえ、やりたい事か……俺にも、そういうのが一つでもあれば、今みたいな感じにはならなかったんだろうな。

『そういう彰はどうなんだ？』

うわ、凄いデジャヴ感。声も竜華だから本当に二度目みたいだ。

「俺は……まだ、決めてないんだ」

『そうか……』

昨日ならこの後、竜華に言われた言葉でつい怒ってしまったが、今の相手は玄平。怒ってはいけない。

『……まあ、そういう者も少なからず居るだろう。卒業と共に就職をとかな』

予想外の答えが返ってきた。

それはやはり、相手が竜華でなく玄平だから。玄平本人の考えなんだ。

『ある意味ではそれも道の一つだ。必ず大学に行かなくてはいいなものでもない、ならばそこを進んでみるのもいい……！』

途中で言葉が止まった。声水が切れたのか。

両手は資料でふさがり、というか持ち歩いてる訳ないか。

どちらにせよ、これ以上の言葉は期待出来ない。

「えっと……ど、どうもな」

何故か、お礼を言っておくべきだと思った。

「……」

言葉は無く、玄平はただ頷いた。

「あれ？ りゅーちゃんおはよ」

「あ、ああ、おはよう奈津保」

「どしたの？ 珍しく遅いけど」

「ああ、実はな…」

3 r d a y ? (後書き)

三日目に入りました。

幼なじみと妙な空気になってしまった主人公、はたして、仲直りすることはできるのだろうか……

それでは、

3rd day ?

玄平による竜華の声を聞いて何故か安心してしまった俺は、それは玄平が竜華の声に変えて言った言葉であって竜華本人には何も言っていない。結局現状は全く変わっていない。

という事に4限の終了間際に気付いた。

思わず声が出そうになる程の気付くの遅すぎだったが、授業中なのでさすがにこらえた。

そうだった……ヤベェな、次は昼休みで、必然的に竜華と顔を合わせるじゃないか。

「彰」

チャンスでもあるが、まだ心の準備ってのが出来てな……

「——き？ おい、彰！」

「!？」

急に呼ばれて前を見れば、そこには竜華が立っていた。

「ど、どどど、どうした？」

「そっちこそどうしたんだ？ もう昼休みだ、場所を空けてやれ」
見ればすでに先生は居ず、皆昼食の準備を始めていた。

俺の隣では、多分いつもここに座っているだろう女子が弁当箱の入った袋を持って立っていた。

つまり……いつの間にか授業が終わってた、と？

「彰？」

「あ、い、いや、悪い……」

俺は慌てて教科書を机の中に押し込んで席を立った。

「こっちだ」

竜華の後に続いていつも昼を食べる席、陽斗の席がある方へ歩いていく。

その竜華の後ろ姿を見る……うん、いつも通りの竜華だよな？
怒ってる様子も、悲しんでる様子もない。普段通りの竜華だ。

……だが、それはぱつと見の外見だけでの判断。竜華って、あまり本心を表に出さないからな、昔っから。

「どうかしたか？」

「いや、別に」

席にはすでに陽斗（は自分の席だから当たり前か）と山吹がいた。隣の席を借りていつもの四人組を作る。

さて、昼飯の準備だ。

「今日は誰が行く？ やっぱりジャンケンか？」

昼は毎回ジャンケンで負けた2人が購買まで買いに行く。たまに賭けと称して別の方法を取ることもある。

「いや、今日それはいいんだ」

しかし、竜華が訂正した。

「え？ どういうことだよ竜華」

「ああ、実はな……」

竜華は視線を下に泳がせ、急に口ごもった。
な、何だ？ どうしたんだ竜華の奴。

「彰」

とたんに泳がせていた視線を真っ直ぐに俺を見た。

「な、なんだ？」

そうか、やっぱり竜華は昨日の事を思い詰めてて、今ここで俺に謝らせようと――

「その……昨日は、すまなかった」

謝――った？

「あの後よく考えたのだが、別に大学へ行かなくてはいけなわけではない。就職もまた、一つの選択肢ではあるのだからな」
何か似た言葉を最近、しかも同じ声で聞いた覚えがある。

「い、いや、あの時は俺も悪かったよ。何か、ついカッとなって言っちゃったただだから……スマン」

「ああ……それでな、そのお詫びと思って……」

用意していたんだろう、席の下から包み袋を取り出して机の上に置

いて、言った。

「……お弁当を作ってきたんだ」

瞬間、俺の時は止まった。

「それでな、一人分だけ作るならと思い、皆の分も作ってきたんだ」

その言葉に、陽斗と山吹、そして聞こえて知っていただろう数人のクラスメイトの動きも止まった。

「おーっす竜華、彰、昼飯食おーぜー」

その時扉が開き、聞こえてきた紀虎の声で俺達は揃って再生した。

「おお紀虎、ちょうど良い時に来たな」

「あん？　どういう意味だよ」

「実はな、今日は私が弁当を作って来たんだ。多目に作ったから紀虎も一緒に食べよう」

「!？」

だが代わりに、紀虎の時間が止められてしまった。

「あ……え、えっと、そうだ！　ワリィ！　アタシ用事あったんだった！　じゃ、じゃあな！」

時を止められながら震えながらも言い切った紀虎は、言い切るや否や扉をガラガラと閉め、走り去る音を残して行ってしまった。

「そうか、用事ならば止めるわけにはいかないな。さあ皆、遠慮せ

ずに食べてくれ」

包みが解かれ、その中身がさらされた。

包みの中は大きめのタッパが2つ重なっていた。上に見える方はのりで巻かれた黒いおにぎり。なら下の方はおかずの類だろう。

……さて、何故竜華の発言で時間が止まったりしたか。

うっすら気づいていると思うが、あえて少し説明しよう。

竜華の実家は中華料理屋をしている。俺も昔から何度も行っているが、店主である竜華の親父さんが作る料理はどれも旨い。竜華のお袋さんもそれにひけを取らない腕前だ。

だが、その2人の血を引いた竜華の料理は……何をどうしたらそうなるのかと言いたいくらいに美味くなかった。

美味くないのも問題だが、更に言えば、見た目だけは良いという方が問題だ。

その姿に騙され、過去何度口にした事か……今思い出すのも嫌になる。

そんな品物が今、俺達の前には並んでいるのだ。

以上、説明終わり。

『……』

俺、陽斗、山吹は互いに顔を見合わせる。3人共その威力を知っている以上、出来れば手を出したくない。何とかして、ごまかす方法を考えなくては……

「あ、彰、青川がお前に作って来たんだから、まずはお前から手を付けるべきだろ、な？」

は、陽斗、お前！

「そ、そうだね！　ハルくん言うとおりだよ！　あきくんからどうぞ！」

山吹まで！　……って、そりゃそうか。

何とか避けたいし、そもそも最初に俺に作って来たって言ったもん

な。

「彰、早く食べてくれないと2人が待ちくたびれてしまうぞ」

竜華の手によって、おにぎりが一つ手渡される。

「お、おう……」

これで逃げ道無し。

手の上にあるおにぎりを食べる道しか残されていない。しかし、その先は必ず……

だがしかし、竜華が詫びを兼ねて作ってきた物。

ここで俺が食わねば、竜華の思いを無下にしてしまう。ならば……

「……竜華、サンキューな」

「あ、彰？」

「いただきます！」

決意を固め、俺はおにぎりを一口で――

「……あれ？」

いつの間にか眠ってしまったようだ。

顔を上げて前を見れば、席に誰も座ってない。というか誰もいない。時計を見れば、時刻はすでに放課後で……って。

放課後！？

ということとは俺、少なくとも5時限全部寝てたってことだろ？ そんなに眠くなるほど昨日の遅くまで起きてないし、何か他の理由が……

「……あ」

あ、あったじゃねえか。

思い出したぞ、今日の昼休みに、竜華が作ってきた弁当を食べて、そして……

「う……」

ダメだ、思い出すのも苦しい。

とにかく、そういう理由で寝た俺を皆はやさしき見守ってくれて、置いて行ったわけか……

「……って、さすがに誰か起こしてくれてもいいだろ！」

油断してたら、明日の朝までここで過ごしてたかも知れないんだぞ。

「まあ、今更言っても仕方ないけど」

とりあえず起きれたんだ。もう日も暮れそうだし、さっさと帰ろう。俺は鞆を持ち、席を立った。

「あれ？」

そこでふと、目に映る物が一つ。

隣の席に、鞆が置いてあった。この席は確か――

「あ、緑葉くん」

声がした方を向くと、教室の扉を開けた雀耶さんが教室の中へ入ってくるどころだった。

「お目覚めですね。おはようございます」

扉を閉めて、自分の席、鞆の置いてある席へと向かう。

「お、おはよう……ひょっとして、待っててくれたの？」

「はい、竜華の料理については南野さんから聞きました。そして竜華は、先生に呼ばれて行ってしまったので、わたしが代わりに待っていたんです」

「そうだったんだ、ありがとう、雀耶さん」

俺達は並んで寮へと向かっていた。

すでに部活帰りの生徒もいない時間で、2人きり落ち葉降る並木道を歩いていた。

「そうですか、そのような事が……」

その道すがら、俺は寝る原因となった竜華との帰路からを話した。

「わたしが一緒に帰れなかったばかりに、そのような事になってしまったんですね……」

原因は自分とばかりに、しゅんと落ち込んでしまった。

「雀耶さんのせいじゃないよ。俺がついカッとなったただけだからさ」
「ですが……」

「それに、今さっき俺が起きるのを待っててくれたんでしょ？　なら、それでおあいこってことでさ」

「緑葉くん……はい、ありがとうございます」

「どういたしまして」

何故ここでいきなりお礼を言うのか分からず、言った後顔を見合わせた俺達は笑いあった。

「ところでさ、雀耶さん」

「はい？」

一頻り笑ったところで、俺は訊ねてみた。

「昨日、さ、黒石と何を話してたの？」

事の発端を言えば、それだ。そこから今の状況になった訳で、できればその内容が知りたい。

「それは……ですね」

訊ねた瞬間、笑っていた雀耶さんの顔が急に悲しげなものになってしまった。

「あ、いや、別に話したくないならいいんだけどさ」

やはりあんな表情をしていたほどだ、気軽に話せるようなことじゃないんだろう。

「……緑葉くん、一つ、聞いてもいいですか？」

雀耶さんが立ち止まった。つられて俺も立ち止まる。

「なに？」

「……緑葉くんは、今がずっと続けば良いな、と思いませんか？」
今がずっと続けば？

「ど、どういう意味？」

「そのままの意味です。わたしや竜華、そして他のクラスメイトの

皆さんと過ごす楽しい今という時間。これがいつまでも続いたとして、幸せではないでしょうか？」

「……」

な、何を言って……

「暑すぎず寒すぎない、今という『秋』の時間……わたしは、緑葉くんと一緒に過ごしてみたいです」

「さ、雀耶……さん？」

言葉を紡ぐ雀耶さんの顔には、悲しげな表情が溢れている。

いったい、どうしたって言うんだ？

「……すみません、少々言い過ぎてしまいました。緑葉くん、また明日です」

言い終えた途端、雀耶さんは走り出した。

「雀耶さん!？」

急なことに足が動かず、走り去る雀耶さんをただ呆然て見送ってしまった。

3 r d a y ? (後書き)

物語の本質となる言葉が出てきました。

今がずっと続けばいい

これが意味するのは、これから始まる一つの出来事の答えにして、間違い。

さて、どうなることやら……

epilogue \ re start \ prologue

「……」

一人走り去った雀耶さんの後を追うように、俺は一人寮へ帰っていた。

雀耶さん……急に走り出したりして、昨日の逆みたいだな。

しかし……今がずっと続けば、か。

ふと、今日の出来事を思い返してみる。

朝、早く出たことにより紀虎と出会った。

珍しい名前の本を知り、紀虎の新たな一面を見た気がした。

HR前に、配当係として玄平と共に仕事をした。

卒業後の話をしてくれたり、色々と助けられな。

昼休みは……竜華の謝罪と、弁当が………うん、これはあまり思い返さない方がいいな。

そして、放課後、雀耶さんと一緒に帰って――

――今がずっと続けば良いな

――今という、『秋』の時間が

「……」

なるほど、なんとなく分かった。

暑すぎず寒すぎない。それもだけど冬になれば俺達3年生は受験生

としてそれぞれの道へ完全に進み始める。

受験の準備や公休などで全員が集まる時は少なくなり、それが終われば卒業式の練習……つまり卒業式がある。

それは高校生活の終わりで、それは皆とのお別れだ。

今みたいな事が終わる

今みたいな事はもう出来ない

今みたいな秋は、もう、来ない

——ああ、そっか

「今が、ずっと続けばいいな——」

そうすれば、だって——

「その願い、ちゃんと聞いたぜ」

「？」

前から声がした。

「今がいい、今が続けばいい、今とはイコールこの季節。『秋』」
聞き覚えのある声の主が、向こうから歩いてきた。

「黒石？」

「よっす、昨日の放課後ぶりだな」

「何言ってるんだよ、今日学校で！」

「いや、今日学校で黒石の姿を見てない。俺より前の席に座ってるから、目に入らない訳がないのに。」

「俺、今日教室には入ってないからさ。わりと忙しくして授業時間も昼休みも全部費やしたんだよ」

そんなに大仕掛けなのか。

「……また、何かするのか？」

「おう、緑葉お待ちかねの、コレだ」

黒石は一冊のノートを見せた。それは先日書いていた小さなノート、雀耶さんの歓迎会だと思ってたやつだ。

「へえ、どんな事するんだ？」

「今緑葉が言った感じのやつ」

俺が言った？

「ま、それは起こってからのお楽しみってことで。始めるぜ」

黒石はポケットからペンを取り出した。

いつもサプライズを開始する時はアレを出して、宣言する。

「黒石 曜、おそらく今年最大にして最後のビックサプライズ！」

題名は……そうだな……」

黒石がノートの表紙にペンを走らせる。そこに書かれたのは、例えるなら魔方陣と呼ぶべき形。

書き終えた途端、魔方陣が輝きだした。

「ちょ、ちょっと待てよ！　せめて何をするかだけはちゃんとやってくれよ！」

「それ言ったらサプライズにならないだろ？」

ということは、まさかサプライズ仕掛けられるのって俺か!?

「でも、ただ一つだけ言うなら、終わらせるには鍵を5つ集めるといいぜ」

鍵? 終わらせる? やはり黒石の考えてることはよく分からない。

「あ、そうだ、この題名が良いな」

思い付いたように魔方陣の上に文字が付け足された。

「それじゃ、始めようか――」

終わることなき続く今

変わることなく続く秋

今続き 続き秋

f a l l ~ c o d a ~ a u t u m n

○	n	3
o	e	s
r	x	t
?	t	d
o	o	a
r		y
?		f
o		i
r		n
△		↓
o		
r		
⋮		
⋮		
⋮		

e p i l o g u e \ r e s t a r t \ p r o l o g u e (後書き)

三日目の終了、それと同時に、『秋』の始まりです。

勘の良い方ならすでに最後の文でどんな感じになるか分かってしまうでしょうが、そうです、そんな感じに進みます。

予定としては、来月、12月、今年中には書き終えたいと思っています。

そして、開始される12月までの間に、これまでの感想を頂けたら幸いです。

これを読んでくださったそこの貴方、何か一言残していきませんか？

それでは、

4th day pattern? (前書き)

開始した、秋の物語。

若干変わった文章の書き方をしていますが、どうぞお楽しみください。

4th day pattern?

朝

——目覚ましとして使っている携帯のアラームが鳴り響いた。

「ん……朝か」

携帯を取ってアラームを切る。

ふと時間を見ると、

「……あれ？」

何故か、いつもより早かった。

？ 今日何か用事でもあったっけ？ 思い返してみると、

「……ああ、そうだ」

思い出した。昨日、童華に合わせるために早く設定して、そのままだったんだ。

「昨日……」

昨日の帰り道を思い出す。雀耶さんのあの言葉を聞いて、走り去った雀耶さんを見送った後——特に何も無く寮に帰って来たんだよな。

まあ仕方ない、今から二度寝したら絶対遅刻するから起きよう。しかし、いつもより全然早いな、

どうするか……

○早く出てみる

？いつもの時間に出る

？……特に早く出る理由もないし、準備だけしといていつも通りの時間に出るか。

Select ↓ ？

いつも通りの時間に寮を出て、学校へ向かう。

回りには登校中わりとよく見る生徒がちらほらいるが、ほとんどが下級生で名前を知らない。

その中には友達どうしなのだろう、仲良くお喋りしながら歩く生徒達もいる。その声がこの通りの中で一番騒がしく、俺が一人で歩いているというのを強く認識させた。

まあいつものことだし、別に朝から誰かと話ながら行きたいという訳でもないが――

「緑葉くん！」

後ろから聞いたことのある声が聞こえた。

俺が立ち止まって待っていると、声の主は俺の隣に並んできた。

「おはようございます、緑葉くん」

「おはよう、雀耶さん」

並んで歩き出す。

そうだ、この時間帯に雀耶さんも登校するんだったな。

「今日も良い天気ですね」

「うん、そうだね」

秋晴れ、というのか。見上げれば雲こそあるが晴れた空が視界の上に広がっている。

そんな空の下、俺と雀耶さんは話ながら歩き続ける。学校の事、授

業の事、そして竜華の事が主な内容だ。

「それでさ、竜華の料理は…」

「ふふふ、それは逆に一度食べてみたいですね」

「いややめといった方がいいって、俺みたいに放課後まで眠り続けることに……」

そこで不意に思い出した。

昨日の放課後、雀耶さんと一緒に帰り、そして、聞いた言葉……

「……あのさ、雀耶さん」

「昨日のこと、ですか？」

気づいていたらしく、先に言われた。

「うん……あれさ、どういう意味なの？」

「あれは……」

雀耶さんは視線を下に向ける。

少しして、顔を上げ、

「……すみません。何となく、言ってみただけなんです」

「え？ 何となく？」

「はい、今が続く……そんなことあり得るわけがありませんよね。

今だって、こうして前に進んで学校へ向かってるのですから。……

だから、深い意味は無いので、忘れて下さい」

「そ、そっか……」

「はい」

雀耶さんはにっこりと微笑んだ。

けど、笑ってるのに。その中に別の感情があるように見えて、二の句を継げられなかった。

「さあ、早く行きましょう緑葉くん！」

（授業（体育））

本日の体育の授業は、年に一度のお楽しみ……もとい、苦しみ。
男女混合のマラソン大会だった。

コースは校外へ出て寮の方へ向かい、女子寮前にセットされた折り返し地点でUターンして戻ってくるというもの。詳しい距離は分からないが、ノルマは授業時間内に最低女子は5周、男子は7周だ。秋頃で寒いのに加えてかなりの距離、やる気になってやる人の方が圧倒的に少ないだろう。

「はぁ……」

現に俺もそんな一人だ。

授業が始まって約半分が過ぎ、現在4周目。もうのんびり走れば終了時間ぎりぎりでノルマジャストで終われる。

あるいは、あえてペースを上げて走っというてノルマを終えた後のにんびりするか。

どっちにするかな……

？のんびり走る

？急いで走る

？……やっぱり急ぐの面倒だな。多分ノルマは間に合うだろうし、
のんびりで行くか。

Select ↓ ?

「……ん？」

ペースを変えずにのんびり走っていると、後ろの方から誰かの息切れが聞こえた。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

この声は……。俺は後ろを見てその人を確認すると、スピードを落として隣に並んだ。

「大丈夫？ 雀耶さん」

「はあ……？ ああ……緑は……くん」

もはや肩で息を切るような走り方だった。

「なんでそんなに疲れてるの？」

「はひい……最初は……竜かに、合わせ……ていたんです……けど……はふう」

「それは疲れるよ」

竜華は帰宅部ではあるが、紀虎と張り合える体力の持ち主だからな。

「そ、それで……竜かは、先に行って……ノルまを……終えてから……わたし……に、付き合ってくれる……と……はあ」

「雀耶さん、後何周？」

「はひい……あ、後……さん……周、ですう」

じゃあ一周目でおいてかれたのか。竜華が早すぎるのか、雀耶さんの体力がないのか……

「雀耶さん、向こうの学校で部活とか入ってた？」

「い、いえ……それに似たことは、してました……けど……はあ……」

しまった。喋る分の体力を使わせてる時じゃない。

「と、とにかくゆっくり行こうよ、まだ時間もあるし」

「は、はひい……」

竜華ならきつとすぐに追い付くだろう。

「竜華が来るまで俺が付き合うからさ」

「はい……あの、緑葉、くん」

「ん？」

「その……ありがとう……ござい……ます」

「どういたしまして」

竜華が来るまでの間、俺と雀耶さんはのんびりと走り続けた。

4th day pattern? (後書き)

4日目、パターン?をお送りしました。

なぜパターンなのかは、後々分かんと思います、すでに分かった方もいますと思いますが。

そして、途中にあったセレクトの文字。これはつまり、ゲームシナリオの選択に似ています。

ようはこの物語、ゲームシナリオを模して書いている作品です。

自分は初挑戦の書き方に若干戸惑ってはいますが、この作品を書く上でこれが一番しっくりくるので、精進しようと思います。よろしければ、応援のほどを。

次回は一週間以内にお会いしましょう。

それでは、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9525w/>

fall～coda～autumn

2011年12月3日15時48分発行